

加東市地域防災計画（風水害等対策編）新旧対照表

風水害総則-4
第1編 総則
第1章 計画の前提
第2節 防災機関の事務又は業務の大綱、市民等の責務

第1 防災機関の事務又は業務の大綱
2 兵庫県

機関名	災害予防	災害応急対策	災害復旧	災害復興
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>
県警察 (社警察 署)		1 情報の収集 2 救出救助、避難誘導等 3 交通規制の実施、緊急 交通路の確保等 4 行方不明者の捜索及 び遺体の検分		
<略>				

<略>

5 指定公共機関

機関名	災害予防	災害応急対策	災害復旧	災害復興
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>
西日本電信電話株 式会社(兵庫支店) 株式会社エヌ・テ ィ・ティ・ドコモ 関西支社、エヌ・ ティ・ティ・コミ ュニケーションズ 株式会社 KDDI株式会社 (神戸支店) ソフトバンクテレ コム株式会社 ソフトバンクモバ イル株式会社	電気通信設備の 整備と防災管理	1 電気通信の疎 通確保と設備 の応急対策の 実施 2 災害時におけ る非常緊急通 信	被災電気通信設 備の災害復旧	
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>

<略>

第1編 総則
第1章 計画の前提
第2節 防災機関の事務又は業務の大綱、市民等の責務

第1 防災機関の事務又は業務の大綱
2 兵庫県

機関名	災害予防	災害応急対策	災害復旧	災害復興
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>
県警察 (加東警 察署)		1 情報の収集 2 救出救助、避難誘導等 3 交通規制の実施、緊急 交通路の確保等 4 行方不明者の捜索及 び遺体の検分		
<略>				

<略>

5 指定公共機関

機関名	災害予防	災害応急対策	災害復旧	災害復興
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>
西日本電信電話株 式会社(兵庫支店) <u>株式会社NTTド コモ</u> 、エ ヌ・ティ・ティ・ コミュニケーションズ 株式会社 KDDI株式会社 (神戸支店) <u>ソフトバンク株式 会社</u>	電気通信設備の 整備と防災管理	1 電気通信の疎 通確保と設備 の応急対策の 実施 2 災害時におけ る非常緊急通 信	被災電気通信設 備の災害復旧	
<略>	<略>	<略>	<略>	<略>

<略>

7 一部事務組合

団体・管理者名	業務の大綱
北はりま消防組合 加東消防署 加東消防署東条出張所	・市の災害予防・応急・復旧・復興対策に関する事務又は 業務の支援 ・消火、救出、救助・救護活動 ・災害の予防対策
小野加東環境施設事務組合	・ごみ・災害廃棄物の処理への協力
北橋磨清掃事務組合	・ごみ・災害廃棄物の処理への協力
北橋衛生事務組合	・し尿の処理への協力

・社警察署を加東警察署に修正

・機関名の修正

・一部事務組合の記述を追加

第2 市民等の責務

1 公共的団体、防災上重要な施設の管理者

市内の公共的団体、防災上重要な施設の管理者等は、主として次に掲げる責務を果たす。

団体・管理者名	責 務
社会福祉協議会	1 社会福祉施設の被害調査 2 ボランティアセンターの開設・運営 3 生活福祉資金貸し付けの受け付け 4 災害時要援護者避難支援プランの作成協力 5 災害時要援護者の救助・救援の協力
<略>	<略>

風水害総則-12

第2章 災害に関する現状と課題

第1節 自然的条件

第3 気象

2 気象統計

市域に最も近い気象台の観測所である西脇アメダスの記録によれば、気象は年間気温の平均値14.3℃、年間最高気温の平均値35.6℃、年間最低気温の平均値-6.4℃（いずれも1979～2011平均値）、年間降水量の平均値1,374mmである（1976～2011平均値）。月平均降水量を上回るのは主に梅雨時期であるが、それ以外に台風期である9月も月平均降水量が多い。

過去5ヵ年での年降水量は、2007年1,345mm、2008年1,202mm、2009年1,409mm、2010年1,700mm、2011年1,763mmと推移している。

3 気象極値

西脇アメダス資料より極値表、月別平均気温及び月別平均降水量のグラフを以下にまとめた。

雨量極値表

種別 順位	月間降水量 mm	日降水量mm	時間降水量 mm
1位	529 (2011.9)	182 (2011.9.20)	64 (1983.9.28)
2位	452 (1976.9)	167 (1983.9.28)	57 (1996.8.28)
3位	423 (2006.7)	158 (1996.8.28)	56 (1976.9.13)
4位	373 (1993.8)	145 (2004.10.20)	55 (1995.6.26)
5位	369 (2011.5)	138 (2004.9.29)	53 (2000.10.9)

(統計期間：1976.3～2012.2)

第2 市民等の責務

1 公共的団体、防災上重要な施設の管理者

市内の公共的団体、防災上重要な施設の管理者等は、主として次に掲げる責務を果たす。

団体・管理者名	責 務
加東市消防団	1 防災意識の普及協力 2 警報等の収集・伝達、消防・救助・水防活動、避難誘導、警備等の協力
社会福祉協議会	1 社会福祉施設の被害調査 2 ボランティアセンターの開設・運営 3 生活福祉資金貸し付けの受け付け 4 災害時要援護者避難支援プランの作成協力 5 災害時要援護者の救助・救援の協力
<略>	<略>

第2章 災害に関する現状と課題

第1節 自然的条件

第3 気象

2 気象統計

市域に最も近い気象台の観測所である西脇アメダスの記録によれば、気象は年間気温の平均値14.4℃、年間最高気温の平均値35.7℃、年間最低気温の平均値-6.3℃（いずれも1979～2017平均値）、年間降水量の平均値1,445mmである（1976～2017平均値）。月平均降水量を上回るのは主に梅雨時期であるが、それ以外に台風期である9月も月平均降水量が多い。

過去5ヵ年での年降水量は、2013年1,658mm、2014年1,520mm、2015年1,858mm、2016年1,763mm、2017年1,539mmと推移している。

3 気象極値

西脇アメダス資料より極値表、月別平均気温及び月別平均降水量のグラフを以下にまとめた。

雨量極値表

種別 順位	月間降水量 mm	日降水量mm	時間降水量 mm
1位	529 (2011.9)	224 (2015.7.7)	64 (1983.9.28)
2位	466 (2013.9)	182 (2011.9.20)	61.5 (2014.8.24)
3位	452 (1976.9)	167 (1982.9.28)	59 (2017.9.17)
4位	423 (2006.7)	158 (1996.8.28)	57 (1996.8.28)
5位	413 (2016.9)	145 (2004.10.20)	56 (1976.9.13)

(統計期間：1976.3～2018.2)

・加東市消防団の記述を追加

・気象庁データにより2017（平成29）年までの数値に修正

・気象数値の対象期間を変更したことに伴う修正

風水害総則—14

第2節 社会的条件

第1 人口・世帯

平成22年国勢調査によれば、市の総人口は、40,181人、世帯数14,133世帯、人口密度255.1人/k㎡である。人口分布は、社地域52%、滝野地域30%、東条地域18%となっており、社地域に人口の5割強が集中している。世帯平均人数は2.8人であり、世帯数は人口分布と似た割合で分布している。

平成22年の人口は、平成17年に比べ増加している。増加数は211人、増加率は+0.5%である。その内訳は、社地域+143人、滝野地域+53人、東条地域+15人の増加となっている。

65歳以上の人口が占める割合は、22.1%で、65歳以上の親族がいる世帯の割合は40.9%、うち高齢単身世帯は16.8%である。高齢者がいる世帯の割合は社地域が39.8%、滝野地域が36.0%、東条地域が52.3%である。

平成22年国勢調査によると、加東市の昼夜間人口は、昼間人口が約10.4%夜間人口より多い状況である。

人口・世帯

人口	世帯数	人口密度	平均世帯人員
40,181人	14,133世帯	255.1人/k㎡	2.8人

地域別人口

区分	人口総数	男	女	世帯数
社地域	20,875 (52%)	10,233	10,642	7,436
滝野地域	12,020 (30%)	5,909	6,111	4,197
東条地域	7,286 (18%)	3,596	3,690	2,500
加東市計	40,181(100%)	19,738	20,443	14,133

資料) 平成22年度国勢調査

年齢別・地域別人口

単位:人

区分	0～14歳	15～64歳	65歳以上	総数
社地域	2,915(14%)	13,603(65%)	4,357(21%)	20,875(100%)
滝野地域	1,950(16%)	7,555(63%)	2,515(21%)	12,020(100%)
東条地域	940(13%)	4,357(60%)	1,989(27%)	7,286(100%)
加東市計	5,805(14%)	25,515(64%)	8,861(22%)	40,181(100%)

資料) 平成22年国勢調査

昼夜間人口

単位:人

区分	夜間人口	昼間人口
加東市計	40,181	44,378

資料) 平成22年国勢調査

第2節 社会的条件

第1 人口・世帯

平成27年国勢調査によれば、市の総人口は、40,310人、世帯数15,086世帯、人口密度255.9人/k㎡である。人口分布は、社地域51%、滝野地域31%、東条地域18%となっており、社地域に人口の5割強が集中している。世帯平均人数は2.7人であり、世帯数は人口分布と似た割合で分布している。

平成27年の人口は、平成22年に比べ増加している。増加数は129人、増加率は+0.3%である。その内訳は、社地域+404人、滝野地域+448人、東条地域+85人の増加となっている。

65歳以上の人口が占める割合は、25.3%で、65歳以上の親族がいる世帯の割合は42.6%、うち高齢単身世帯は19.9%である。高齢者がいる世帯の割合は社地域が42.2%、滝野地域が37.4%、東条地域が52.3%である。

平成27年国勢調査によると、加東市の昼夜間人口は、昼間人口が約10.6%夜間人口より多い状況である。

人口・世帯

人口	世帯数	人口密度	平均世帯人員
40,310人	15,086世帯	255.9人/k㎡	2.7人

地域別人口

区分	人口総数	男	女	世帯数
社地域	20,471 (51%)	9,869	10,602	7,835
滝野地域	12,468 (31%)	6,188	6,280	4,566
東条地域	7,371 (18%)	3,562	3,809	2,685
加東市計	40,310(100%)	19,619	20,691	15,086

資料) 平成27年度国勢調査

年齢別・地域別人口

単位:人

区分	0～14歳	15～64歳	65歳以上	総数
社地域	2,614(13%)	12,738(62%)	5,015(24%)	20,471(100%)
滝野地域	1,883(15%)	7,585(61%)	2,933(24%)	12,468(100%)
東条地域	929(13%)	4,199(57%)	2,213(30%)	7,371(100%)
加東市計	5,426(14%)	24,522(61%)	10,161(25%)	40,310(100%)

資料) 平成27年国勢調査 (ただし総数は年齢不詳を含む)

昼夜間人口

単位:人

区分	夜間人口	昼間人口
加東市計	40,310	44,591

資料) 平成27年国勢調査

・国勢調査の数値を平成27年数値に修正

・平成27年国勢調査の数値に修正

・平成27年国勢調査の数値に修正

・平成27年国勢調査の数値に修正

・平成27年国勢調査の数値に修正

第2 土地利用

加東市では、山林の占める割合が最も多く、次いで田、その他が続いている。また、宅地は全体の約11%となっている。

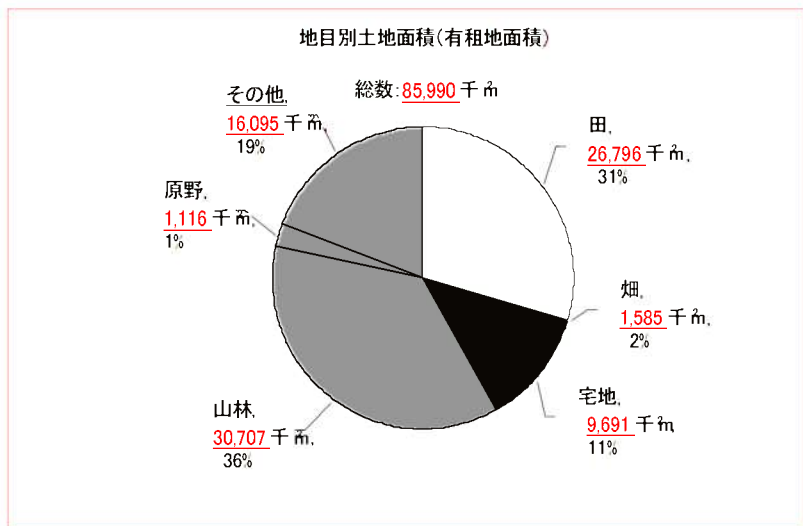


図 地目別土地面積（有租地面積）
資料）平成22年度版加東市統計書

<略>

第2 土地利用

加東市では、山林の占める割合が最も多く、次いで田、その他が続いている。また、宅地は全体の約11%となっている。

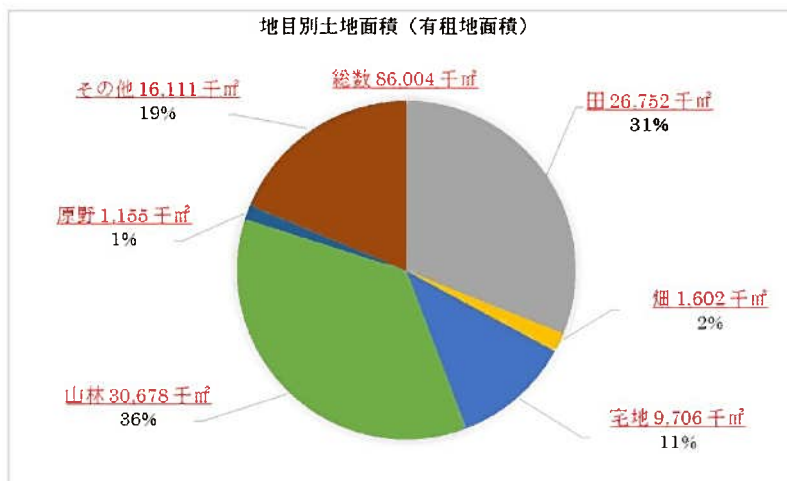


図 地目別土地面積（有租地面積）
資料）平成26年度版加東市統計書

<略>

・平成26年度版加東市統計書の数値に修正

第4 産業

加東市では、第3次産業就業者数が最も多く、増加傾向にあるが、その反面第1次産業及び第2次産業就業者数が減少傾向となっている。

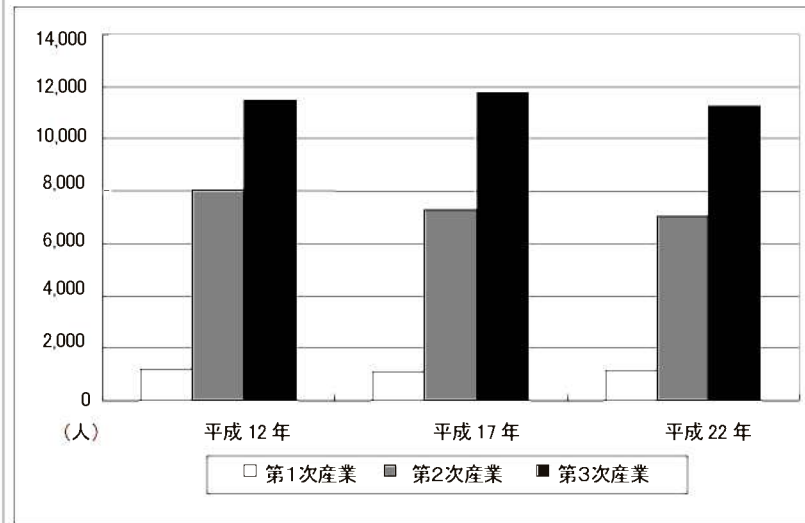


図 産業別就業者数
資料) 平成22年 国勢調査

風水害総則—19

第3節 風水害等の危険性と被害の特徴

第1 風水害発生状況

2 県内での風水害発生状況

県内で発生する風水害としては、梅雨・秋雨前線による豪雨、雷雲の発達等による局所的豪雨、台風による風水害（高潮害、波浪害を含む）、異常潮位現象による高潮、フェーン現象等による火災などが考えられる。

このうち、兵庫県内を襲った過去の風水害で大きな被害をもたらしたものは、梅雨前線による豪雨と台風の襲来に伴う風水害であり、発生時期は7月上旬と9月に集中している。そのうち、人的被害の大きなものは下表のとおりであるが、これ以外にも多くの災害が記録されている。

災害の名称	発生年月日	死者	負傷者	被災地域	
梅雨前線	梅雨前線による豪雨	昭和 7.7.1~2	44人	19人	主として東播磨地域
	梅雨前線による豪雨	昭和 13.7.3~5	731人	1,463人	県内全域（特に神戸市）
	梅雨前線による豪雨	昭和 36.6.24~28	41人	119人	阪神・淡路・東播磨地域
	昭和42年7月豪雨	昭和 42.7.9	100人	102人	阪神・淡路地域
	昭和46年7月豪雨	昭和 46.7.17~18	22人	100人	西播磨地域

第4 産業

加東市では、第3次産業就業者数が最も多いが、第1次産業就業者数と同様に減少傾向にある。その反面第2次産業就業者数が増加傾向となっている。

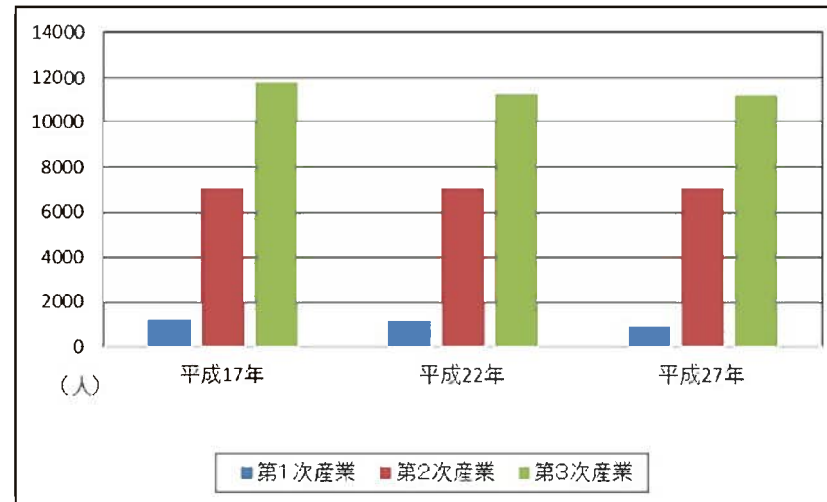


図 産業別就業者数
資料) 平成27年 国勢調査

第3節 風水害等の危険性と被害の特徴

第1 風水害発生状況

2 県内での風水害発生状況

県内で発生する風水害としては、停滞前線による豪雨、雷雲の発達等による局所性豪雨、台風による風水害（高潮害、波浪害を含む）、異常潮位現象による高潮、フェーン現象等による火災などが考えられる。

このうち、兵庫県内を襲った過去の風水害で大きな被害をもたらしたものは、梅雨前線による豪雨と台風の襲来に伴う風水害であり、発生時期は7月上旬と9月に集中している。そのうち、人的被害の大きなものは下表のとおりであるが、これ以外にも多くの災害が記録されている。

災害の名称	発生年月日	死者	負傷者	被災地域	
梅雨前線	梅雨前線による豪雨	昭和 7.7.1~2	44人	19人	主として東播磨地域
	梅雨前線による豪雨	昭和 13.7.3~5	731人	1,463人	県内全域（特に神戸市）
	梅雨前線による豪雨	昭和 36.6.24~28	41人	119人	阪神・淡路・東播磨地域
	昭和42年7月豪雨	昭和 42.7.9	100人	102人	阪神・淡路地域
	昭和46年7月豪雨	昭和 46.7.17~18	22人	100人	西播磨地域

・平成27年国勢調査の数値に修正

・県計画に合わせて修正

【新旧対照表（風水害等対策編）】

<現 行>

台風	台風 室戸台風	大正 7.9.13~14 昭和 9.9.21	120人 281人	28人 1,523人	主として但馬地域 県内全域（特に神戸、但馬、淡路）
	ジェーン台風 台風17号	昭和 25.9.3 昭和 51.9.8~13	41人 19人	904人 41人	県内全域 県内全域（特に西播磨・但馬）
	台風23号 台風9号	平成 16.10.20~21 平成 21.8.9~10	26人 20人	134人 7人	県内全域（特に但馬、淡路） 主として西播磨地域

特に被害が甚大なものとしては、梅雨前線による水害として、昭和13年と昭和42年の豪雨を、台風による風水害として、室戸台風、ジェーン台風、平成16年台風23号及び平成21年台風9号を取り上げ、災害の概要を記述する。

(1) 昭和13年の梅雨前線による豪雨災害

昭和13年7月3日から5日にかけて、梅雨前線の北上に伴い、神戸市を中心に県内で雨が降り続き、総雨量は神戸市で461.8mm、洲本で359mmにも達した。この豪雨によって、住吉川、芦屋川など、表六甲諸河川は土石流を伴って大きな氾濫を起こし、六甲山地では山津波を伴って土砂の流出や流木が甚だしく、神戸市を中心に道路や鉄道等の交通も途絶するなど、未曾有の大水害をもたらした。このほか、播磨地域では市川、夢前川、揖保川、千種川、但馬地域では円山川、出石川等が氾濫し、淡路地域では、ため池が約1,500箇所で大壊した。

六甲山地はもとも基岩の花崗岩の圧砕や風化が進んでおり、また急斜面も多いことから地質的、地形的に土砂災害が発生しやすい。当時、六甲山地にほとんど砂防施設がないところに、山地開発も始まっていたことから被害が一層大きくなった。この災害から2か月後の昭和13年9月には六甲砂防工事事務所（現六甲砂防事務所）が設置され、水害復興のための砂防工事が国の直轄施工となり、現在も六甲山系における砂防工事の多くが同事務所によって施工されている。

また、市街地の土地の有効利用を図るため、生田川、西郷川、都賀川などは暗きよになっていたが、土砂や流木によって閉塞され大災害の原因となったことから、災害後、元の姿に戻された。

(2) 昭和42年7月豪雨による災害

昭和42年7月9日には、台風7号から変わった弱い熱帯低気圧によって西日本一帯で梅雨前線の活動が活発になり、雨量は神戸市で319.4mmに達した。なかでも16時から17時までの1時間には75.8mmの雨量を観測した。雨量が300mm以上の降雨地域は、西宮市から神戸市須磨区まで広がり、河川の氾濫で広範囲に浸水したほか、山麓部では崖崩れが多発した。

この水害を昭和13年の水害と比べてみると、神戸市での総雨量は昭和13年の方が多かったが、日降雨量や時間雨量は昭和42年の方が多くなっているなど、集中豪雨の規模そのものに大差はなかったが、被害状況にはかなりの違いがみられた。

昭和13年の災害は、表六甲市街地での土砂災害が顕著であったが、この災害では市街地への流出土砂量は少なかった。これは砂防施設の整備や主要河川の改修が功を奏したためである。しかし、中小河川には暗きよが多いこともあって浸水被害がかなり発生したことから、昭和45年度には「都市小河川改修事業」が始まり、天神川、北野川など都市部の小河川の改修が進められた。また、谷あいや急傾斜の近くまで宅地化が進み、これらが土地の直撃を受け人的被害が集中した。そのため、人家に被害を及ぼす恐れのある急傾斜地については、私有地であっても公費により崩壊防止工事ができるよう、「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」が施行されることになった。

<改 正 後>

台風	室戸台風	昭和 9.9.21	281人 231人	1,523人	県内全域（特に神戸、但馬、淡路）
	河久根台風	昭和 20.10.8~11	41人	92人	県内全域（特に西播磨、東播磨、但馬）
	ジェーン台風	昭和 25.9.3	41人	904人	県内全域
	台風16号	昭和 35.8.29	32人	65人	主として神戸・阪神地域
	台風23、24号	昭和 40.9.10~17	26人	765人	県内全域
台風23号	平成 16.10.20~21	26人	134人	県内全域（特に但馬、淡路）	
台風9号	平成 21.8.9~10	20人	7人	主として西播磨地域	

※ 昭和以降の死者20人以上のもの

特に被害が甚大なものとしては、梅雨前線による水害として、昭和13年と昭和42年の豪雨を、台風による風水害として、室戸台風、ジェーン台風、平成16年台風23号及び平成21年台風9号を取り上げ、災害の概要を記述する。

(1) 梅雨前線による豪雨災害

① 昭和13年の梅雨前線による豪雨災害

昭和13年7月3日から5日にかけて、梅雨前線の北上に伴い、神戸市を中心に県内で雨が降り続き、総雨量は神戸市で461.8mm、洲本で371.8mmにも達した。この豪雨によって、住吉川、芦屋川など、表六甲諸河川は土石流を伴って大きな氾濫を起こし、六甲山地では山津波を伴って土砂の流出や流木が甚だしく、神戸市を中心に道路や鉄道等の交通も途絶するなど、未曾有の大水害をもたらした。このほか、播磨地域では市川、夢前川、揖保川、千種川、但馬地域では円山川、出石川等が氾濫し、淡路地域では、ため池が約1,500箇所で大壊した。

六甲山地はもとも基岩の花崗岩の圧砕や風化が進んでおり、また急斜面も多いことから地質的、地形的に土砂災害が発生しやすい。当時、六甲山地にほとんど砂防施設がないところに、山地開発も始まっていたことから被害が一層大きくなった。

この災害から2か月後の昭和13年9月には六甲砂防工事事務所（現六甲砂防事務所）が設置され、水害復興のための砂防工事が国の直轄施工となり、現在も六甲山系における砂防工事の多くが同事務所によって施工されている。

また、市街地の土地の有効利用を図るため、生田川、西郷川、都賀川などは暗きよになっていたが、土砂や流木によって閉塞され大災害の原因となったことから、災害後、元の姿に戻された。

② 昭和42年7月豪雨による災害

昭和42年7月9日には、台風7号から変わった弱い熱帯低気圧によって西日本一帯で梅雨前線の活動が活発になり、雨量は神戸市で319.4mmに達した。なかでも16時から17時までの1時間には75.8mmの雨量を観測した。雨量が300mm以上の降雨地域は、西宮市から神戸市須磨区まで広がり、河川の氾濫で広範囲に浸水したほか、山麓部では崖崩れが多発した。

この水害を昭和13年の水害と比べてみると、神戸市での総雨量は昭和13年の方が多かったが、日降雨量や時間雨量は昭和42年の方が多くなっているなど、集中豪雨の規模そのものに大差はなかったが、被害状況にはかなりの違いがみられた。

昭和13年の災害は、表六甲市街地での土砂災害が顕著であったが、この災害では市街地への流出土砂量は少なかった。これは砂防施設の整備や主要河川の改修が功を奏したためである。しかし、中小河川には暗きよが多いこともあって浸水被害がかなり発生したことから、昭和45年度には「都市小河川改修事業」が始まり、天神川、北野川など都市部の小河川の改修が進められた。また、谷あいや急傾斜の近くまで宅地化が進み、これらが土砂の直撃を受け人的被害が集中した。そのため、人家に被害を及ぼす恐れのある急傾斜地については、私有地であっても公費により崩壊防止工事ができるよう、「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」が施行されることになった。

<修正理由>

・県計画に合わせて修正

・県計画に合わせて修正

・県計画に合わせて修正

・県計画に合わせて修正

<p>(3) 室戸台風 <略></p> <p>(4) ジェーン台風 <略></p> <p>(5) 平成 16 年台風 23 号による災害 平成 16 年は、過去最多 10 個の台風が日本に上陸し、各地で多数の被害を出した。中でも平成に入って最悪の人的被害をもたらした台風 23 号について取り上げる。 台風 23 号は秋雨前線を刺激しながら北上し、10 月 20 日に高知県土佐清水市に上陸、その後淡路島の南を通り、紀伊水道を経て 18 時前に大阪府泉佐野市付近に再上陸した。上陸後、本州を縦断し、房総半島から太平洋に出て、21 日 9 時に温帯低気圧に変わった。雨量は、淡路地域で 24 時間雨量が 300mm を超える地域が広範囲に分布した。但馬地域では、円山川流域全体にわたり 24 時間雨量が 200mm を超えた。21 箇所で破堤し、円山川水系で 4,100ha、洲本川水系で 880ha、加古川水系で 450ha が浸水した。道路の通行止めも、最大 266 箇所となった。人的被害は死者 26 人、負傷者 134 人、住家被害は全壊 783 棟、半壊 7,142 棟（内、大規模半壊 1,548 棟）、一部損壊 1,506 棟、床上浸水 1,745 棟、床下浸水 9,058 棟であった。 豊岡市では、円山川と出石川が氾濫し、市全世帯の半数以上が浸水被害にあり、市民の約 9 割にあたる 42,000 人に避難指示が出されるという事態になった。</p> <p>(6) 平成 21 年台風 9 号による災害 <略></p> <p>第 2 風水害等の危険性</p> <p>(1) 梅雨・秋雨前線等の停滞による豪雨、記録的短時間の局所的豪雨 <略></p> <p>(2) 台風による風水害 <略></p> <p>(3) 大規模事故等災害 <略></p>	<p>(2) 台風による風水害</p> <p>① 室戸台風 <略></p> <p>② ジェーン台風 <略></p> <p>③ 平成 16 年台風 23 号による災害</p> <hr/> <p>平成 16 年の台風 23 号は 10 月 20 日に高知県土佐清水市に上陸、その後淡路島の南を通り、紀伊水道を経て 18 時前に大阪府泉佐野市付近に再上陸した。上陸後、本州を縦断し、房総半島から太平洋に出て、21 日 9 時に温帯低気圧に変わった。雨量は、淡路地域で 24 時間雨量が 300mm を超える地域が広範囲に分布した。但馬地域では、円山川流域全体にわたり 24 時間雨量が 200mm を超えた。21 箇所破堤し、円山川水系で 4,100ha、洲本川水系で 880ha、加古川水系で 450ha が浸水した。道路の通行止めも、最大 266 箇所となった。人的被害は死者 26 人、負傷者 134 人、住家被害は全壊 783 棟、半壊 7,142 棟（内、大規模半壊 1,548 棟）、一部損壊 1,506 棟、床上浸水 1,745 棟、床下浸水 9,058 棟であった。 豊岡市では、円山川と出石川が氾濫し、市全世帯の半数以上が浸水被害にあり、市民の約 9 割にあたる 42,000 人に避難指示が出されるという事態になった。</p> <p>④ 平成 21 年台風 9 号による災害 <略></p> <p>第 2 風水害等の危険性</p> <p>① 梅雨・秋雨前線等の停滞による豪雨、記録的短時間の局所的豪雨 <略></p> <p>② 台風による風水害 <略></p> <p>③ 大規模事故等災害 <略></p>	<p>・県計画に合わせて修正</p> <p>・県計画に合わせて修正</p> <p>・通し番号の修正</p>
--	---	---